

## 森?外「二人の友」論 : 芸術と学問の関係から見る ?外の学問観

著者	王 晨野
雑誌名	日本文藝研究
巻	72
号	2
ページ	93-110
発行年	2021-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00029442">http://hdl.handle.net/10236/00029442</a>

## 森鷗外「二人の友」論

——芸術と学問の関係から見る鷗外の学問観——

王 晨 野

### 一、はじめに

「二人の友」は大正四年五月十四日に書き終わり、同年六月一日に雑誌『ARS』第一卷第三号に発表された小説である。

「二人の友」は鷗外が実事によって書いた。F君は鷗外の同郷の青年、福岡博のことであり、安国寺さんは曹洞宗の僧侶、太平山安国寺の玉水俊媿のことである。F君について、小説で「それから四五五年の後に私は突然F君の訃音に接した。咽喉の癌腫のために急になくなつた」と書かれたように、福岡博は明治四十五年二月三日に病気で死亡した。また、鷗外が「二人の友」を発表した時、安国寺さんのモデルの玉水俊媿は小説で書かれたように「重い病氣」を患っており、大正四年十月四日に死亡した。小堀桂一郎氏は、本編の小説は、「当人に送呈されて病氣見舞の役割を果たした」と指摘した<sup>(1)</sup>。

しかし、安国寺さんの病氣について、小説では次のように書かれた。

私が満洲で受け取った手紙のうちに、安国寺さんの手紙があつた。その中に重い病気のためにドイツ語の研究を思ひ止まつて、房州辺の海岸転地療養に往くと云ふことが書いてあつた。(以下略)

満洲で年を越して私が凱旋した時は、安国寺さんはもう九州に帰つてゐた。小倉に近い山の中の寺で、住職をすることになつたのである。

鷗外は日露戦争で第二軍軍医部長として、明治三十七年二月から明治三十九年一月まで中国大陆に出征しており、その間に玉水俊雋の病を知つた。山崎一穎氏の考証によると、俊雋の病氣は結核であつた。そして、大正四年九月十八日に再発して死に至つた<sup>(2)</sup>。福間博が亡くなつた明治四十五年二月から、俊雋が危篤になつた大正四年九月まで、この四年間に、鷗外はなぜ大正四年にこの小説を書いたのであるうか。恐らく小説の掲載媒体である雑誌『ARS』と関係がある。

『ARS』はラテン語の「芸術」の意味である。創刊号に掲載した「阿蘭陀書房の言葉」と題する後書きに、「移り星変れども世に不思議なる芸術の矜は尽きず」、「詩は自動車の叫びとなり、絵は三角となるこの頃のかりこもの乱れに、プラグマチズムの烽火いかに勢ひたりとも、つりしのぶ昔の恋の物のあはれぞいやさらになつかしき」<sup>(3)</sup>という文から見ると、創刊者に当たる北原白秋は詩と絵画をはじめとした芸術の推進のため、芸術を志望した青年の応援を目的にして『ARS』を創刊した。恐らく鷗外は『ARS』の主旨から、才能がある若い二人のことを思い出したのだらう。

また、鷗外は上田敏と共に『ARS』の顧問を担当してゐた。鷗外は『ARS』に小説「二人の友」以外に、大正四年四月に美術学生M君を主人公にした小説「天籠」、同年八月に浪花節を聞いた時のことを書いた「余興」、同年九月に音楽学校のドイツ人教師グスタフ・クローンの依頼で、フィンランドの作曲家シベリウスの曲を翻訳した<sup>(4)</sup>「アテネ

人の歌」の三篇を投稿した。この三篇は絵画と歌を描いたため、いずれも芸術と深い関係があり、雑誌の創刊目的にも沿っている。しかし、「二人の友」は、「私」がドイツ語の天才のF君との交際、僧侶の安国寺さんとの交換授業、及び安国寺さんとF君の交際のことを書いた。この小説は、芸術を志す青年が主題というより、才能がある青年たちの勉学と日常が描かれ、詩や絵画などの芸術を推進したい『Ars』の主旨からやや離れている。

田中実氏はF君を西洋の知識人、安国寺さんを東洋の知識人、「私」を両方の学問に通じる全能者として次のように解釈した。F君と安国寺さんの物語から、「東洋の「学徳」が西洋の分析的知性に圧倒され、衰退させられ、それによって逆にその西洋の分析的知性の有効性の限界が露わになり、「私」にとつての〈二人の友〉の関わりにこそ、「私」の生きてきた日本の近代の姿があるとともに、その歪曲した不幸な構造が示されている」<sup>5)</sup>と指摘した。要するに、「二人の友」の根底にあるのは鷗外の学問についての考え方である。ならば、鷗外における学問と芸術の関係を問わなければならない。

本稿では小説と実話のズレ、鷗外における学問と芸術の関係性を研究した上で、鷗外が学問に対する態度を究明する。

## 二、福岡博とF君

「二人の友」は、「私」が「豊前の小倉に足掛三年ゐ」た時にF君と安国寺さんと知人になり、東京に戻ってからも二人との交際を続けていたことを描いた。F君とは、「初の年の十月」に鍛冶町に住んだ頃から交際を始めた。安国寺さんとは、「京町の家に引き越した頃から」、交際を始めた。その後、「私」が東京へ帰った時、F君も安国寺さんも東京に来て、交際を続けた。

「二人の友」は主に鷗外の実体験によって書かれた小説である。鷗外は明治三十二年六月に小倉に行き、鍛冶町八十七番地に住み、明治三十二年十月十二日にF君のモデルである福間博と知人になった。その後、明治三十三年十一月二十三日に安国寺さんのモデルである俊虢と知人になり、十二月二十四日に京町五丁目五十四番地に引っ越した。そして、明治三十五年三月に東京に帰った。

鷗外の記事と書簡から、小説で書かれた交際の過程が確認できる。例えば、福間博との初対面の日、明治三十二年十月十二日の條に、鷗外は以下のように記録に残した。

十二日。公退後一客に接す。福間氏、名は博。石見国安濃郡刺鹿村の人。明治八年五月二十二日生る。卒然予に語りて曰く。嘗て東京に在りて先生の教を承げんと欲す。先生の事多きを知るを以て敢て請はず。今先生僻境に在り。必ずや多少の閑暇あらん。幸に我に獨逸文学の蘊奥を授けよ。此数百里の行をして徒勞に帰せしむること勿れと。予聞きて半信半疑し、試みに坐右の獨逸書を披きて読ましむるに、誦読翻訳、百に一失なし。乃ち充して毎夕一時間来りて疑を質さしむ。(6)

また、F君に貸した旅費について、鷗外は母宛ての書簡に、明治三十四年「八月十六日以降二十六日間に六回にわたって、福間から借金について何らの音沙汰のない」<sup>(7)</sup>と訴えた。このように、小説はほとんど事実通りに書かれている。

また、鷗外の長男森於菟は俊虢と共に福間博にドイツ語を教わったことがあり、福間博と俊虢のことを次のように回想した。

(引用者注…玉水俊虢のことを) 私たちはもと住持していた小倉の寺の名で安国寺さんと呼んだが痩せて丈も低く眼が凹んで、

頭は汚く鉢を入れ、頬にも顎にもいつも無精ひげが延びていた。風采は甚だあがらない。小倉では父に唯識論を講じ、父から獨逸哲学を教わって楽しんだのであった。東京へ帰ってからの父は多忙で福間さんからの獨逸語の質問をうけるひまも、私に獨逸語を教える時間も持たぬと同時に安国寺さんとの交換教授もできなくなった。私は福間さんの所に獨逸語を教わりに行き、安国寺さんも私と机をならべて勉強することになった。(中略)さて福間さんの弟子にされた安国寺さんは私よりはるかに出来なかつた。父に獨逸哲学の本を逐語訳に教えて貰ってたやすく理解した坊さんは、獨逸文法を発音語格の変化から教えこまれ機械的の暗記を強いられた。安国寺さんは神經衰弱になった。また安国寺さんは父の依頼で平易な仏典の講義を祖母と義母とのためにした。これは父の願望した家庭教育と平和のためのものであるが認むべき成果は挙げなかつた。結局安国寺さんは失望して淋しく九州に帰った。(8)

於菟の回想はほとんど小説に描かれた出来事と同じである。しかし、明治三十七年に俊媿は肺結核のために転地療養していたが、小説で「私は安国寺さんが語学のために甚だしく苦しんで、其病を惹き起したのではないかと疑つた」と書かれたように、於菟は同じく「安国寺さんは」「機械的の暗記を強いられ」、「神經衰弱になり」、「失望して淋しく九州に帰つた」と、福間博の暗記を強要する教授法が俊媿の病の一因だと推測した。於菟の回想は昭和三十七年に書かれた。五十数年前の十代頃の出来事に関する記憶に、小説「二人の友」、及び父鷗外から聞いた話がどのくらい影響を与えたかは不明である。

しかし、当時のドイツ語教育において、暗記法が一般的である。福間博は明治三十六年に上京した。第一高等学校での履歴書によると、福間博は明治三十六年に第一高等学校でドイツ語の教師になり、明治三十八年に正式に教授になった(9)。第一高等学校に福間博と同世代のドイツ語教師は、夏目漱石の『三四郎』(『朝日新聞』、明治四十一年九月、十二月)の広田先生のモデルと言われた岩元楨とドイツ人のエミール・ユンケルがいた。当時の第一高等学校は規定

の教科書がなく、教員によって選別する。松井健人氏の調査によると、岩元禎の教授法は「彼独自の発音と訳語を用いて、生徒に読ませることなくひたすらにドイツ語原文を訳読していく」。教科書は「教養主義的なドイツを中心としたヨーロッパ古典文学作品」が多い。エミール・ユンケルは、「徹底的な暗記」を推奨し、「詩や散文の暗誦を主体」とする<sup>10)</sup>。

また、芥川龍之介や久米正雄や菊池寛は第一高等学校時代、明治四十三年度に一年三組として福間博のドイツ語の授業を受けた<sup>11)</sup>ことがある。芥川は以下のように回想した。

福間先生は常人よりも寧ろ背は低かつたであらう。何でも金縁の近眼鏡をかけ、可成長い口髭を蓄へてゐられたやうに覺えてゐる。僕等は皆福間先生に或親しみを抱いてゐた。それは先生も青年のやうに諧謔を好んでゐられたからである。先生は一学期の或時間に久米正雄にかう言はれた。

「君にはこの言葉の意味がクメとれないですか？」

久米も亦忽ち洒落を以て酬いた。

「ええ、ちよつとわかりません。どう言ふ意味がフクマつてゐるか——」

福間先生は二学期からいきなり僕等にケラアデ・アウスと云ふギズキイの警句集を教へられた。僕等の新単語に悩まされたことは言ふを待たないのに違ひない。僕は未だにその本にあつた、シユタアツ・ヘモロイダリウスと云ふ、不可思議な言葉を記憶してゐる。この言葉は恐らくは一生の間薄暗い僕の脳味噌のどこかに木の子のやうに生へてゐるであらう。<sup>12)</sup>

そして、同級生の菊池寛は以下のように回想した。

一年生のとき、福岡博と云ふ先生が「ゲラーデアウス」と云ふドイツ語の教科書を使った。これは、ドイツの社会思想家のグティキイとか云ふ男の随筆集で、社会主義的な警句集だった。この本からは我々はみんな多少とも思想的な影響を受けたと思ふ。福岡先生のことには前にもかいたがドイツ語をやつてまだ一学期にしかならない我々を、思想的には既に大人と見て、メルヘンや小説などを選ばず、忽ちかう云ふものをもよませたのは、この人の卓見だと思ふ。さすがに、鷗外博士の弟子だけはあると思ふ。<sup>13)</sup>

二人が福岡博について印象に残ったのは用いた教科書であつた。一般的に教科書として選ぶ「メルヘンや小説など」ではなく、福岡博は社会主義思想集の教科書を選んだのである。「この言葉は恐らくは一生の間薄暗い僕の脳味噌のどこかに木の子のやうに生へてゐるであらう」、「この本からは我々はみんな多少とも思想的な影響を受けた」と二人の回想から見ると、福岡博の教授法は暗記法が特徴的というより、教科書を選ぶ傾向から学生に思想的な面にも教えようとする意識が顕著的である。芥川と菊池寛の回想において、小説「二人の友」でF君は安国寺さんを病に罹らせたぐらい語格の規則の暗記を強要したが、福岡博にこのような暗記を強いられたことはない。つまり、「二人の友」において、鷗外はモデルの福岡博のユーモアや思想形態などを捨象し、当時一般的な暗記法である教授法を取り上げ、学問の理想が高く、無遠慮で我が道を行くF君像を作り上げた。

才能がある若者という点において、F君は鷗外が一ヶ月前に同じ雑誌『ARS』に発表した小説「天籠」のM君と類似している。しかし、M君にとって、審査員の「私」は指導者の立場にいる師に当たる人物である。それに対して、前述した菊池寛の回想で、菊池寛が福岡博を「鷗外博士の弟子」と認識し、小説ではF君が「私にドイツ語を学びたい」ということになっているが、F君と「私」の交際から見れば、「二人の友」と題したように、「私」は師という指導者より、F君と知識を交換する友人という立ち位置が明白である。このように、F君の「私」が同等な地位にいる



ことにより、「私」とF君が安国寺さんに対する教授法が比較対象にあげられ、「私」とF君の交際が続くと共に、関係性も変わっていく。さらに、「私」と主人公の青年の関係性が異なる一方、M君は芸術青年であることに對して、F君は学問に邁進する青年である。前述したように、雑誌『ARS』は芸術青年の応援を目的にした雑誌である。では、「二人の友」を『ARS』に投稿した鷗外は、学問と芸術の関係をどのように考えているのか。

## 二、学問と芸術

「二人の友」は芸術を応援するための雑誌『ARS』に発表された一方、鷗外における芸術と学問は異なる定義である。「しがらみ草紙の本領を論ず」（『柵草紙』第一号、明治三十二年十月）では、主に文学・詩学について論じたが、道学、哲学も言及した。上垣外憲一氏は次のように指摘した。

しかし、『しがらみ草紙の本領を論ず』では、芸術に最も力点を置きながらも、機智、徳義、風雅、即ち学問、道徳、芸術がそれぞれ真、善、美の伝統的三分法に對照して、一国民にとってはどれを欠いても人間性の完成を望み得ない三つの柱として並列されていた。こうした或る意味で常識的な、異なる原理間の調和という考え方は、特に学問と芸術の関係としては、鷗外にとって最後まで並列的な形で残っていたように思われる。<sup>14)</sup>

ドイツ留学から帰国した鷗外は既に芸術と学問を区別していた。学問は真理を追求する学科であり、芸術は美を追求する学科である。

では、鷗外にとって芸術は何だろうか。小説家を目指して上京した小泉純一を描いた小説「青年」（『スバル』第二年第三号〜第三年第八号、明治四三年三月〜明治四四年八月）の主題について、長谷川泉氏は次のように指摘した。

での悪い作品「青年」の内容を構成する主軸は三つある。すなわち、純一の創造力が芸術家として成熟する過程。その二は、純一の人生観・世界観、とくに自然主義勃興当時の個性の覚醒や新時代の道德思想などに促されて成長してゆく考え方の形成過程。その三は、純一の恋愛および性慾の体験。(中略)そして、これら二つのモメントは、すべて第一のモメント、純一の作家としての成長に帰結する。<sup>45)</sup>

すなわち、生の体験は芸術家の芸術性を豊かにすることができ、芸術家を成長させる。芸術と生は対立する関係ではなく、共存するものである。同じ雑誌『ARS』に発表した画学生M君を描いた小説「天籠」(『ARS』第一巻第一号、大正四年四月)で「私」が師友の交際を勧めたのは、M君を生と直面させるためのである。

しかしその一方、「二人の友」において、学問に対する態度が違う。小説で、「私」とF君の関係は何回も変わった。最初にF君が「私」にドイツ語を学びたい」と言った時、「私」は「若し狂人にはあるまいか」と疑った。そして「私」はWundt(引用者注：ドイツの心理学者、哲学者のヴンド)の本をF君の前に出し、F君が「発音が好く、「すらすらと読」み、「殆ど術語のみから組み立て、ある原文の意味を、苦もなく説き明かした」。「私」は「F君は狂人どころでは無い。君の自信の大きいのは当然の事である」と考えた。そして、F君がお金がないと言った時、「私」は「又頗る君を軽くし」、F君のことを「微倖者」と見ている。すなわち、「私」における葛藤は、F君の学問の造詣の高さとF君の動機の不純という学問と道德の二つの側面をめぐるものである。「私」にとって理想的な知識人像は学識の深さが判断の唯一の基準ではない。

その後、「私」とF君の距離が縮まった理由は以下のようである。

F君と私の距離を縮めた、主な原因は私が君の「童貞」を発見した処に存ずる。君が殆ど異性に関する知識を有せぬことを発見した処に存ずる。

(中略)

此事があつてから私は、F君の異性に対する言動に、細かに注意した。そして君が此方面に於いて全く無経験であることを知つた。君は衣食の闕乏を憂へない。君は性欲を制してゐる。君は尋常の微幸者とは違ふ。君は兎に角えらいと、私は思つた。そこで初め君との間に保留して置いた距離が次第に短縮するのを、私は妨げようとはしなかつた。

「私」がF君と距離を縮めたのはF君が「異性に関する知識を有せぬ」童貞だと知つたからである。「性欲を制してゐる」ことが「兎に角えらい」という考え方からみると、異性を制することが出来るか出来ないかが学問の岐路となる。フランス語勉強について意見が分かれた後、「私」とF君は「時々逢つて遠慮のない話をする。二人の間には世間並の友人関係が成り立つたのである」と、学問の交流がなくなつたが、世間並の友人関係が成り立つた。そのことに對し、F君が女学生と結婚し、第一高等学校の教師になつてから、「私」とF君が忙しく、「互に訪問することを許さぬので、私は時々巢鴨三田線の電車の中で、君と語を交えるに過ぎな」く、関係が薄れている。要するに、「私」は無意識に学問と異性を対立させている。

鷗外の小説で、学問と女性関係が対立する構造となつてゐるのは稀ではない。「舞姫」(『国民の友』、明治二十三年一月)で、豊太郎がエリスと別れる最後は示唆的である。

また、「妄想」(『三田文学』第一卷第三号、第四号、明治四四年三月、四月)に学問に対して以下のような文がある。

時としてはその為事が手に附かない。神経が異様に興奮して、心が澄み切つてゐるのに、書物を開けて、他人の思想の跡を

辿つて行くのがもどかしくなる。自分の思想が自由行動を取つて来る。自然科学のうちで最も自然科学らしい医学をしてゐて、*cast*な学問といふことを性命にしてゐるのに、なんとなく心の飢を感じて来る。生といふものを考へる。自分のしてゐる事が、その生の内容を充たすに足るかどうだかと思ふ。

生まれてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆けられてゐるやうに学問といふことに齷齪してゐる。<sup>46</sup>

この一文は学問と生をめぐる思考である。上垣外憲一氏は以下のように指摘した。

引用文中の何かしら強制的に勉強させられている、という感覚は、国家有用の学問を要求する政府、そして直接的には軍陣に於いて役立つ医学を要求する陸軍軍医局の上司たちの存在によつて引き起こされたものである、という解釈ができる。しかし、鷗外はそのような背景の黒幕的存在を特定せずに、単に「何物」とだけ呼んでいる。しかも冒頭で明言されている対立の図式は、鷗外対国家ではなくして、自然科学と「生」の対立である。<sup>47</sup>

鷗外にとつて、自然科学、真理の追求を目指す学問と政治、恋愛を内包する生の対立が調和できない矛盾である。小説において、F君と知り合つた小倉時代の「私」は妻がおらず、生と対立して学問に専念している。そこで、「私」は「異性に関する知識を有せぬ」F君が生と対立する姿勢を見て共感したため距離を縮めたのだろう。学問と芸術は生との関係性が違う。

## 四、「二人の友」から見る学問観

では、鷗外は学問についてどのように認識しているのか。小説に入る前に、まずは鷗外にとって学問の定義を確認したい。

鷗外は明治二十年にドイツ留学中のベルリンで「Eindrucke (感想)」や「Ideensplitter (想片)」といったメモで、ドイツの学問論に触れ、彼の考えを記録した。日本の大学は学問を行うべき場所でない、学問の自由が保証されなければならない、実験・観察・帰納法を重視するという<sup>(18)</sup>内容であった。帰国後の鷗外はドイツの学問観を吸収し、明治二十二年に「大学の自由を論ず」と題する文章に、ヨーロッパの大学を例として挙げ、功利主義を除いた大学の自由、学問の自由を唱えた<sup>(19)</sup>。また、明治三十五年三月二十四日に鷗外は小倉から東京へ出発する前に、小倉偕行社で陸軍関係者相手に「洋学の盛衰を論ず」と題する講演を行なった。この講演では、「学問の生物たり、特異の雰囲気を得て始めて成長する」と学問を成長させる「雰囲気」の重要性を説いた<sup>(20)</sup>。鷗外が吸収したドイツの学問観の基盤となったのは、ドイツ人ヴァイルヘルム・フォン・フンボルトが提唱した「フンボルト理念」である。この理念は「学問 (Wissenschaft) とは、確定した知識を伝達するものではなく、真理の探究を完結させずに継続的に行うものである<sup>(21)</sup>と唱えた。鷗外はドイツの学問観を受け、「学問は何か功利的な目的のための手段ではなく、真理を探究する営みそのものを意味<sup>(22)</sup>と認識した。

小説は小倉で「私」とF君の交際をめぐる前半と、東京でF君と安国寺さんの交際をめぐる後半に二分されている。

安国寺さんにドイツ語を教えることに関して、「私」とF君は以下のように異なる方法を使った。

そこで安国寺さんは哲学入門の訳読を、私にして貰ふ代りに、F君にして貰おうとした。然るに私とF君とは外国語の扱方が違ふ。私は口語でも文語でも、全体として扱ふ。F君はそれを一々語格上から分析せずには置かない。私はKocherさん（引用者注…ドイツ系ロシア人の哲学者ケーベル）の哲学入門を開いて、初のパエジから字を逐つて訳して聞せた。しかも極めて仏經の語を用ゐて訳するやうにした。唯識を自在に講釈するだけの力のある安国寺さんだから、それを丁度尋常の人が「*Prüfung*」（引用者注…初学書、入門書）や読本を解するやうに解した。F君はこの流義を踏襲することを肯ぜずに、安国寺さんに語格から教へ込まうとした。安国寺さんは全く違つた方面の労力をしなくてはならぬので、ひどく苦しんだ。

（中略）

私が満洲で受け取つた手紙のうちに、安国寺さんの手紙があつた。その中に重い病気のためにドイツ語の研究を思ひ止まつて、房州辺の海岸転地療養に往くと云ふことが書いてあつた。（中略）私は安国寺さんが語学のために甚だしく苦しんで、其病を惹き起したのではないかと疑つた。どんな複雑な論理をも容易く辿つて行く人が、却つて器械的に語んじなくてはならぬ語格の規則に悩まされたのは、想像しても気の毒だと、私はつくづく思つた。

「私」は安国寺さんが熟知している仏經をドイツ哲学と結びついてドイツ語を教えたことに對し、F君は機械的な暗記を強要し、語格から教えた。そして、安国寺さんが東京を離れたのは重い病気のためであるが、「私」はその病気が語学の勉強が原因だと疑つた。つまり、「私」から見れば、F君の教授法は、安国寺さんにとっては苦しみの種であり、学問探究の妨げである。そこで「私」は安国寺さんのことを「気の毒だ」と思つた。結果的に、「私」は安国寺さんが語学勉強を放棄したのは、F君の教授法が原因であると思ひ込んだ。

このような強要的な教育への反感は鷗外のほかの文章からも窺える。鷗外はドイツ留学から帰国後、日本の大学制度を次のように批判した。

研究者は学を愛し、營業者は学に服す。愛するものは猶世俗の食色に於けるが如く、服するものは猶俘囚の鞭笞を見るが如し。夫れ之を愛せり。故に一時岐路に迷ひ、花柳に耽り、賭博に遊ぶものありと雖ども、決して全く心を喪ふに至らず。其再び学問の途に上ること、旅客の郷に還るが如し。彼俘囚の学生に至ては、則ち課程嚴なり、服制肅たり、而れども桎梏一たび脱して、逃奔して、逃奔還らず。刻薄假すことなきの学監ありと雖ども、果たして何の用をか為さん。<sup>四</sup>

上記の文章では、鷗外は政府・大学が学生・研究への過度の干渉を反対し、学問の自由を提唱した。政府・大学という枷を掛ける具体的な対象を含め、鷗外は外部から学生・学問への干渉を嫌悪している。学生は学問の道の「岐路に迷ひ」、内部による阻害が発生した場合に、学問の道に帰れるが、外部による阻害や干渉が発生する場合、学問の道から遠ざかつていく。すなわち、鷗外が提唱したのは、外部による干渉がない学問でできる環境である。小説で安国寺さんの教授法をめぐって、「私」は「Kober」さんの哲学入門を開いて、初のペエジから字を逐つて訳して聞せた。しかも始めて仏經の語を用ゐて訳するやうにした」ことを通して安国寺さんにドイツ語を教えたというより、ドイツ語を使って安国寺さんにドイツ語哲学の扉を開いた。しかし、F君の教授法は語格に止まり、学問探究への導きが見えない。「どんな複雑な論理をも容易く辿つて行く」安国寺さんはひどく苦しんでおり、語学勉強を放棄した。F君は「私」の教授法を「踏襲することを肯ぜずに」、一方的な教授を安国寺さんに押し付けた。安国寺さんの学問の道、ドイツ哲学と仏經唯識の比較研究はF君の「桎梏」によつて閉ざされた。

「私」とF君が学問に関する意見の相違は安国寺さんの教授法以前に既にあつた。

これが頗る私と君との交際の上に影響した。なぜかと云ふに、君が尋ねて来ても、私はフランス語の事を話すからである。君は、「フランス語も面白いでせうが、僕は二つの語を浅く知るより、一つの語を深知りたいのです」と云ふ。「亦一説だね」

と、私は云ふ。此背面には、さうばかりは行かぬと云ふ意味がある。君はそれを察する。そして多少気まづく思ふ。其上余りに往來した挙句に、必然起る厭倦の情も交つて来る。そこで毎日來た君が一日を隔てて来るやうになる。二日を隔てて来るやうになる。譬へて言へば、二人は最初遠く離れた並行線のやうに生活してゐたのに、一時其距離が逼り近づいて来て、今又近く離れた並行線のやうに生活することになつたのである。

一つの言語に専念するF君の姿勢に対して、「私」は多くの言語を勉強したいという姿勢を取る。外国語の勉強の意義について、鷗外は「洋学の盛衰を論ず」(『公衆医事』第六卷第四号、第五号、明治三五年六月)で以下のように述べた。

予は外国語を以て、併せて外国学を研究する用に供せしめんと欲するなり。或は曰く。既往の外国語を修めし者は、能く書を読み、其語を口にすること能はず。今後は唯ゞ會話せよ。書を読むこと勿れと。予は真に外国語に通ずるものゝ、會話と讀書と、之くとして不可なることなきを信ず。若し會話のみにして足ると曰はゞ、是れ庖丁の外国語のみ。<sup>24)</sup>

この文から鷗外が外国語話者に求めるものが窺える。外国語は「外国学」を学ぶ一つの手段であり、学問研究の手段である。外国語話者は言語の勉強が最終の目的ではなく、外国語を通して更なる学問の探究が求められている。

このような姿勢は小説でも窺える。例えば、F君と初対面の時、F君が「私」のしているドイツ語の専門的な心理学の本をすらすらと読み上げたことで、「私」は「F君は狂人どころでは無い。君の自信の大きいのは当然の事である」とF君の学問を認めた。そして、ドイツ語に精通した「私」はフランス語を勉強し始め、真理探究の手段を増やそうとした。恐らく「私」はドイツ語だけでは、真理探究の限界を感じただろう。しかし、F君が「一つの語を深く知りたい」という学問に対するアプローチは「私」とは違う。学問の真理探究の道で、「私」は一つの道が通じない



場合に別の道を探すが、F君は一つの道に専念する。「私」とF君が学問に対する根本的な差はここにある。

## 五、おわりに

鷗外は学問と芸術の違いを知っているが、「二人の友」を『ARS』に投稿した。鷗外は「学問の自由研究と芸術の自由発展とを妨げる国は栄える筈がない」<sup>10)</sup>と訴えたように、学問と芸術は未来の繁栄に関わる重要な学問分野である。そして、学問と芸術のいずれも生との関係性が異なるが、個人の内部から生と向き合わなければならず、外部の束縛を脱しなければならぬ。この点において学問と芸術は同じものである。鷗外はこの思いを込めて、才能がある青年を見守りながら、彼の学問観を小説に書き込み、「二人の友」を『ARS』に投稿したのでらう。

※本文引用：『鷗外全集』第一六卷、岩波書店、昭和四八年二月。

本文注釈引用：『鷗外近代小説集』第六卷、岩波書店、平成二四年一〇月。

なお、全ての引用は、原則として新字に改め、ルビは省略した。

- 注(1) 小堀桂一郎、『高瀬舟』、『森鷗外文業解題 創作篇』、岩波書店、昭和五七年一月、一一七頁。
- (2) 山崎一穎、『玉水俊弒』、『鷗外ゆかりの人々』、教文堂、平成二一年五月、二二七頁。
- (3) 阿蘭陀書房、『阿蘭陀書房の言葉』、『ARS』第一巻第一号、大正四年四月。
- (4) 瀧井敬子、『アテネ人の歌』、『森鷗外事典』、平川祐弘編、新曜社、令和二年一月一〇日、一六頁。
- (5) 田中実、『二人の友』の〈三人の知識人〉、『森鷗外研究』第二冊、和泉書院、昭和六三年五月、五六頁。
- (6) 森鷗外、『小倉日記』、『鷗外全集』第三五巻、岩波書店、昭和五〇年一月、三〇二頁。
- (7) 川田国芳、『二人の友』について、『近代文学論集』第三号、昭和五二年、一六頁。

- (8) 森於菟、「観潮楼玄関番列伝」、「父としての森鷗外」、筑摩書房、平成五年九月、五七～五八頁。(初出…『文学散歩』、昭和三七年一〇、二月)。
- (9) 福岡博、「二高の履歴書」、「鷗外」第一一号、昭和四七年七月、九七頁。
- (10) 松井健人、「旧制第一高等学校のドイツ語教育課程と教授方法にかんする史的考察 東京大学総合文化研究所・教育学部駒場博物館第一高等学校関連資料を中心に」、「東京大学文書館紀要」第三八号、令和二年三月、一一頁。
- (11) 注(10)に同じ、一〇～一四頁。
- (12) 芥川龍之介、「二人の友」、「橄欖樹」第一高等学校校友会第三百号記念号、大正一五年二月、一六四頁。
- (13) 菊池寛、「半自叙伝」、「菊池寛全集」第二十三卷、文芸春秋社、平成七年十二月、四〇頁。(初出…『文芸春秋』、昭和三年十一月)
- (14) 上垣外憲一、「森鷗外とドイツの学問・芸術論」、「東洋大学紀要 教養課程篇」第二三三号、昭和五九年三月、二五頁。
- (15) 長谷川泉、「青年」論、「森鷗外論考」、明治書院、平成三年七月、六三三頁。
- (16) 森鷗外、「妄想」、「鷗外全集」第八卷、岩波書店、昭和四七年六月、二〇〇頁。(初出…『三田文学』第二卷第三号、第四号、明治四四年三月、四月)
- (17) 注(14)に同じ、一七頁。
- (18) 児島由理、「森鷗外と十九世紀ドイツの学問観」、「鷗外」第六八号、平成一三年一月、一五二頁。
- (19) 森鷗外、「大学の自由を論ず」、「鷗外全集」第二二卷、岩波書店、昭和四八年八月、一九～二二頁。(初出…『国民の友』第五十七号、明治二二年七月二二日)
- (20) 森鷗外、「洋学の盛衰を論ず」、「鷗外全集」第三四卷、岩波書店、昭和四九年一月、二二四頁。(初出…『公衆医事』第六卷第四号、第五号、明治三五年六月)
- (21) 注(18)に同じ、一五二頁。
- (22) 林正子、「学問的真理」の今日的価値と社会的意義―鷗外研究(豊熟)の一年―、「日本近代文学」第九〇卷、平成二六年五月、一二二頁。
- (23) 注(19)に同じ、二二頁。

(24) 注(20)に同じ、二二八頁。

(25) 森鷗外、「文芸の主義」、『鷗外全集』第二六卷、岩波書店、昭和四八年二月、四二五頁。(初題…「文芸談片」、初出…『東洋』第五号、明治四四年四月)

(おう しんや・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程)